

探し物を手伝ってほしい、だなんて  
適当な嘘をマジで信じるとは思わなかったわW

お人好しも大概にしておかなきゃ  
冒険者として生きていけないぜえW

や...やめて...くださいますし...  
こんなこと.....っ

ああ、もう抵抗できないみたいだしな  
痛めつけるのはもう勘弁してやるよ

でもな、  
俺たちの用はまだ  
済んじやいねえんだよ

そんな...ど、どうか...  
わたくしは主さまの元で  
お仕えしなくては...

コッコロちゃんだっけ?  
いいよ、もうそんな  
心配しなくてもさ

これから俺たちが  
ご主人様になつてやるからよオ

.....っ!

そんなに奉仕が好きなら  
これからたっぷり  
ご奉仕させてやるよ...クククッ

あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...

探し物を手伝ってほしい、だなんて  
適当な嘘をマジで信じるとは思わなかったわW

お人好しも大概にしておかなきゃ  
冒険者として生きていけないぜえW

や...やめて...くださいますし...  
こんなこと...っ

ああ、もう抵抗できないみたいだしな  
痛めつけるのはもう勘弁してやるよ

でもな、  
俺たちの用はまだ  
済んじやいねえんだよ

そんな...ど、どうか...  
わたくしは主さまの元で  
お仕えしなくては...

コッコロちゃんだっけ？  
いいよ、もうそんな  
心配しなくてもさ

これから俺たちが  
ご主人様になつてやるからよオ

.....っ！

そんなに奉仕が好きなら  
これからたっぷり  
ご奉仕させてやるよ...クククッ

あ...っ

は...

は...





「ようこそ、今日からここが  
コッコロちゃんのお家だよ」  
「さしずめ俺達は家族ってやつだな」  
「い……ッ！嫌でございます！  
わたくしは早く本当のお家に——」

薄暗い森の奥。  
アジトに戻ってきてから男たちの行動は早かった。  
もう待ちきれないとかばかりに、少女をあらゆる姿で抱き上げる。  
少女の抵抗はあまりにか弱く、男たちの嗜虐心を昂ぶらせた。

「だーめ。もうキミはずっと、俺達にご奉仕をして生きていくんだよ」  
「ひっ……！！いや……」  
「さて、まずは最初のお仕事を  
してもらおうかな」

奉仕、という言葉が少女の心臓を冷たくさせる。少女はまだ幼いとはいえ、ある程度の知識は持っていた。脳裏によぎる自らの主——あの純朴な少年にする。奉仕とはまったく異質なことを、この男たちは求めている。

「……っ！」  
「もう我慢できないんだよねえ」  
「こ、これは……このような大きさ……  
とてもわたくしがお相手できるような  
ものでは……」

背後の男が取り出した肉棒が、少女の幼い花弁を前に脈動する。  
性行為をまだ経験したことのない少女にとって、この肉棒が  
自分にとってどれほどの苦痛を与えるのか。  
未知の恐怖に怯える少女の背に冷や汗が伝う。

「こっちだから大丈夫だよ」  
「ひっ……ぎうううううっ!!」  
「ハハハ! お上品な口から初めて  
良い声が出たね」

しかし男の行動はまったくの予想外であった。  
少女の尻穴に男の剛直がねじ込まれる度に、  
可憐な口からぐもった声漏れる。  
無意識のうち尻に力を入めるが、  
それは男にとってただの刺激にしかない。



「ぐ……ううっ……お尻が……  
裂けて……しまい……ますっ」  
「大丈夫だよ。コッコロちゃん見た目より  
頑丈にできてるから」  
「俺たちがボコっても骨の一本も  
折れなかったからな」

男たちが口々に無責任な言葉を投げかける。  
少女の尻穴には焼きごてを当てられたような熱と  
裂かれるような痛みが襲い掛かっていった。  
しかし皮肉にも、男たちの言うように少女の穴は  
裂けることもなく、男の肉棒を包み込んでしまっている。

「ほら動くよ。頑張って耐えてね」  
「ま、待っててくださいまし……」  
「あああっ！や、やめ……ひぐうっ！」  
「あーいいいよ、すっごい  
締まっている」

男の為すがままに身体を上下させられ、その度にぬちゅぬちゅという粘性の音が狭い室内に響く。排泄を行う器官に異物が入り出すとしても、少女は身震いした。尻に力を入れて押し出すように、少女の身体が上下運動に合わせて握られていたため、少女の身体が上下運動に合わせて糸の切れたように揺れる。ガクガクと揺れる。

「あぐっ……うあああっ!!」  
「ほら、もうすっかり馴染んでる。  
もしかして後ろエッチの経験ある？」  
「ううっ……そんなもの……  
ありません……っ」

不幸と呼ぶべきか幸いと呼ぶべきか、  
少女の身体はギルド活動によって強靱になっていた。  
並みの少女であったなら、とっくに裂傷により  
大惨事になっていただろう。  
少女の身体はこの異常な強度の刺激に対し、  
あろうことか耐性を得始めていたのである。

「ホントに？そんなこと言って、『主さま』とやらに  
毎晩ご奉仕してんじやないの？」  
「主さまとはそんな関係では……っ……」  
「それにあんなエグイ角度の下着履いてさ、  
ぜったいエッチじゃん」  
「そ、それは……っ」

男の力が腸壁をゴリゴリと削るように擦ってゆく。  
その度に少女はのけ反りそうになる自分の身体を  
必死に抑え、声を抑え、感情を抑える。  
痛みだけにはか少女にとって、男のもたらず刺激は

「草むらで探してるフリして、本当はケツ向けて俺たちのこと誘ってたんだろ？」  
「わたくしは……あなた方が困っていただけから……  
それでお手伝いをしただけで……ごさいます」  
「へーそうなんだ。じゃあこれは何なの？」

この男たちに知られてはいけない。  
そう思う度に、少女の腸壁はきゆうきゆうと男の肉棒を締め上げる。  
浅い呼吸で必死に快感を押し込め、今も尻穴を出入りする肉棒に対し  
嫌悪感だけに集中しようとした。

「きゃうっ……!!  
は……あっ……な、いったい何を……?」  
「マンコぐっしょぐっしょになってんじゃんw」  
「尻に挿れてからずっと  
マン肉ヒクついていたからね。  
気付いてなかった?」

そんな少女の浅い考えはとうに見透かされていた。  
突然襲い来る別種の刺激に、少女は思わず嬌声を上げてしまう。  
背後の男がニヤリと笑う感覚が、背中越しに伝わってくる。

「そんなハズは……わ、わたくしはそんな……」  
「マンコ濡らしながら言っても説得力ないよ」  
「ああっ！お、お願いします……」  
「そこは……ソコは弄らないで  
くださいまし……っ」

男は的確に少女の快感を刺激する。  
少女の狭い膣穴に入れる指も、初めは1本であったが  
程なくして2本3本と増えていった。  
それに伴い、少女の花弁から響く水音もいやらしさを増していく。

「そうだよねえ、エッチなコッコロちゃんは我慢できなくなっちゃうもんねえ」  
「やだっ……やめてくださいまし……！」  
「ほら我慢なんてしなくてもいいんだよ。盛大にイけ」

男が無遠慮に少女のほぐれきった膣穴をかき回す。ぐぼぐぼと、空気と粘液が混じりあった音を立てて、少女の幼い秘所が男の骨ばった指に弄ばれる。もう限界だった。少女の膣口は差し込まれた男の指を美味しそうに啜え込み離すまいと締め付ける。



「あ、ああ……だめえ……くる……何か……  
来て……」  
「どう？お尻の穴がきゅうつとなつて、  
気持ち良かったって言うてるよ」  
「あ……ふあ……何でございますか……  
これ……わたくしの……知らない……」

ぷしっ、と音を立てて少女の秘所から  
粘性を持った透明な液体が発射される。  
それは少女が絶頂を迎えたということに他ならなかった。  
しかし、その絶頂から迎えたという快感は  
一人でする時とはまったく異なったものであった。

「それじゃあ俺も」  
「……あ……あ……あ……っう……!!」  
「あー子供尻マンコ最高」

それとほぼ同時に男の精が腸内に注がれる。他人によつてイカされ、さらに排泄器官に精を注がれる少女の正常な思考を焼き切られてゆく。現実感が、どんどんと遠くなつていく。

「はあっ……はあっ……も、もうお許しくださいまし  
……これ以上は……」  
「そんなこと言っつて、コッコロちゃんの  
下の口が寂しそうにしてるよ」  
「わ、わたくしは……  
そのようなことは……っ」

僅かに残った理性による抵抗。  
これ以上の快感は、少女にとって毒だった。  
しかし、そのような願いを男たちが聞き入れはらずもなく。

「上の穴は素直じゃないなあ。  
嘘つきにはお仕置きだよ」  
「ひっ……ああああっ！は、  
そんなにされたら……っ」  
「おら、イけ」  
「また、くる……くるっ！  
あああっ！！」  
「……ッッ！！」  
「……ッ！」

もう少女は嬌声を抑えることすらできなくなっていた。  
通常絶対に口にしないような言葉でさえ、口を突いて出てしまう。  
そこに普段のお淑やかな従者の姿は、もはや存在していなかった。

「うん、やっぱり下のお口は素直で偉いね」  
「あ……は……あつ」  
「そろそろ俺も混ざっていいか？」

甘いじりされる膣口からもたらされる快感にびくびくと身体を震わせながら、少女はとろんとした目で虚空を見つめた。まだ未発達な胸が上下する。荒い呼吸音に合わせて、室内に灯った明かりがどこからともなく吹いた風に揺られ、男と少女の影をゆらめかせる。

「まだやり足りないんだけどなあ……二穴でいい？」  
「三……え……？ま、まさか……」  
「イチャイチャ見せつけられて  
もう我慢できねえんだよ。  
俺にも“ご奉仕”してくれよ、なあ？」

飛びかけていた少女の意識がふと現実に戻る。  
先程まで壁にもたれかかっていた少女は、  
いつの間にか服を脱いで眼前に迫っていた。  
その股ぐらには、はち切れんばかりに屹立した肉棒を携えている。  
それが意味するところを悟った少女は、俄かに抵抗を見せるが――

「いっ……いけません……そこだけは……」  
「つと」  
「ああああっ！！！！……ひ……っう……んっ♡」

少女のほぐれきった膣口はすんなりと男を受け容れてしまう。それどころか、男の挿入による刺激を気持ちいいとさえ認識してしまった。少女のまだ誰にも許していなかつた最奥部。そこを知らない男の肉棒で犯されてもお、少女は口から切ない男の肉棒が出るのを抑えられなかつた。

「すんなり入ったぜ。トロットロじゃねえか。  
「まったく、エロガキがよお」  
「ひぐっ……ううっ……お願いいたします……  
どうか抜いてくださいまし……」  
「できねえつつつてんだろ！」  
「ひっあ……！」

怒声と共に男に最奥部を抉られ、少女は嬌声を漏らす。  
恐怖と快楽。  
二つの感情が折り重なるように少女へ作用し、  
次第に現実感がまた遠のいてゆく。



「うあっ……あう……んっ……♡」  
「なんだよ、イヤイヤ言ってるわりに  
可愛い声が漏れてんぞ」  
「これは……このようなことっ……  
断じて……わたくしの意思では……っ」

——もしかしたらこれは、ただの悪い夢なのかもしれない。  
薬草を取って帰るだけの、簡単な用事だった。  
その道すがら、困った人の手助けをして……。  
目が覚めたら、美食殿の皆が笑って出迎えてくれて……。

「ふぐうっ……このまま出されてしまうと……  
赤ちゃんが……あっ……」  
「おーおー、できればいいじゃねえか」  
「ひうっ……！どうかそれだけは……  
皆様と……美食殿の皆様と活動が……  
できなくなってしまう……」

しかしどれだけ妄想に逃げたとしても、現実残酷であった。  
ちよっとした踏み違いで取り返しつかない事態に  
なってしまうことだってある。悪意ある人に騙されたりするだけで  
魔物に負けてしまったら、この世界の穏やかな日常は  
失われてしまう——この世界で少女は今になって思い知った。  
薄氷の上に成り立っているというのを少女は今になって思い知った。



「まだそんな心配してんのかよ。もうてめえは俺たちのモンなんだよ！」  
「そ、そんなっ……主さま……」  
「ペコリーヌさま……キヤルさま……」  
「呼んだって誰も来ねえよ。」  
「この小屋で3人で暮らそうや。」  
「主さま”以上”にたっぷり可愛がってやるぜw」

背後の男とは違い乱暴な口調で話しかけてくる男に、少女は嫌悪感を抱いていた。嫌いな男からの抽挿でどうしようもなく感じてしまっている自分に対しても嫌悪が湧き上がる。快感と嫌悪感。その板挟みに遭いながら男たちに嬲られ続け、少女は淫らに肢体を躍らせる。

「わたくしは……っ、あのお家に……  
温かい……皆様が待つあのお家に……」  
「帰れねえよ！」  
「ひっ……あああっ……！！！！」

男の精が少女の子宮に打ち付けられる。  
狭い膣から逆流した精が溢れ、膣口から顔を覗かせる。  
男の吐精した量は、少女が子を宿すのに十分な量であった。

「あ……ああ……う、うそ……  
嘘でございます……このようなこと……」  
「あーめっちゃ出たわ。ガキマンコ気持ちよすぎw」  
「ったく、コッコロちゃんを  
あんま追い詰めすぎんなよ。  
もつと優しく扱えって」

自分が種付けをされたことを受け入れることができないう少女。  
しかし、自分の下腹部に確かに感じる男の脈動と精子の熱さ。  
それはもう否定しようのない事実であった。

「う……ううっ……」  
「大丈夫だよコッコロちゃん。  
俺が優しくするよう言っておくからさ」  
「お……お願いいたします……」  
「どうか、わたくしをお家に……」  
「主さまをお世話しなくては  
ならないのです……っ！」

なぜ自分がこのような目に遭わなければならないのか。  
ただ人に親切にして、喜んでほしかっただけなのに。  
少女の目からとめどなく涙が流れ、感情がむき出しになってしまった。  
背後の男なら、もしかしたら目の前の男より話を  
聞いてもらえるかもしれない。もしかしたら自分の願いをかなえてくれるかもしれない。

「だめだよ、コッコロちゃんは俺たちの  
家族になるんだから」

「……あっ」

「俺からもコッコロちゃんに愛情を

注いであげたいな。いいでしょ？いいよね？」

「そ、それはまさか……もうこれ以上は……  
どうかお慈悲を……」

さっきまで、この男たちが自分にどのようなことをしてきたのか。  
少女は背後の男の垣間見せた優しさに対し、ありもしない希望を  
見てしまっていた。そしてそれは当然のごとく、呆気なく打ち砕かれた。

「ああああああっ!!!」  
「はー、やっぱ子供マンコも締めりがあったってイイなあ」  
「あ……ああっ……♡  
あるじ……さまっ……わたくしは……」

一瞬でも希望を見出してしまった者はそれが壊された時、  
どうしようもない程のダメージを負うことになる。  
たとえそれが、絶望の淵で無理やり見出したものであったとしても、  
“目の前の男に比べて”でしかなかった。  
“目の前の男は優しく、絶望の淵で無理やり見出したものであったとしても、  
”



「いいよ、これからは俺のこと主さまって呼んで」  
「わ、わたくしの……主さまは……あのお方だけ……」  
「これからは俺が主さまになるからさ」

男の声が耳を通して脳に響き渡る。  
それはまるで催眠術のようで、少女は虚ろな目で虚空を見上げた。  
心を壊された少女には、男の言葉は甘い蜜となって徐々に浸透してゆく。

「あんっ……♡はーっ……♡はーっ♡」  
「そうだよ、その調子。もっと自分から動いて」  
「んっ♡……ふっ♡……んくっ……♡」

ああ、もう帰れないんだ……。少女の心が完全に屈服した瞬間であった。それと同時に今まで抑えてきた嬌声が口からとめどなく溢れ出す。

「最高。良い腰使いだよ」  
「はーっ……♡あはっ……♡くうんっ♡」  
「はっ……あーっ♡あーっ♡」

男のピストン運動に合わせて腰をくねらせる少女。  
男の亀頭が少女の弱いところを的確に擦り上げ、  
みるみるうちに少女を快樂の高みに上らせてゆく。  
少女はよだれを撒き散らし、恥ずかじがる様子も見せず嬌声を上げ続ける。

「あるじ……さまあつ……♡」  
「そうだよ、今日から俺がコッコロちゃんの主さまだよ」  
「あるじさまあ……♡」  
「わたくし……この身も……心も……♡」  
「すべてお捧げいたします……♡」

夢と現実の境目で、少女は奉仕すべき「主さま」の姿を思い浮かべながら腰を跳ねさせた。未発達な膣は健気に男の肉棒を咥え込み、主人の快樂のために尽力する。すべては、ご主人様に気持ち良くなってもらうために。

「今日からずっと、俺たち一緒だよ」  
「あはっ♡あはあ♡あ♡あ♡」  
「盛大にイってやがるぜw さっきまで  
貞淑なフリしてたのによw」  
「そう言ってるやがるなw」

最愛のご主人様から子種を注いでもらい、少女の口から  
歓喜の音が溢れ出した。  
一滴でも多く搾り出そうと、膣道が痙攣するようにきゅうっと締め  
男の肉棒をしごき上げる。  
先に注がれていた男の精子と新たに注がれた精子が混じり合い  
少女の子宮を満たした。  
少女はうわ言のように言葉にならない言葉を呟く。

「何はともあれ、これでしばらくは退屈しねえなw  
次は俺にも独り占めさせろよ」  
「ああ、でも簡単に壊すなよ。こんな上等な子、  
滅多に手に入らねえんだからさ」  
「分かってるってw  
さてと、一服したらもう一発  
相手してもらおうかねw」  
「あるじ……さま……あ♥」

その後、この少女に助けが来ることは無かった。  
美食殿のギルドメンバーは全力をもってこの少女を捜索したが、  
結局見つかるには至らなかった。  
少女は毎晩のように抱かれ続け、そのお腹が大きくなっても  
“奉仕”をやめることはない。  
かけがえのない2人の“ご主人様”に愛され、  
少女は末永くその使命を全うしたのであった。











































































